

ホトトギス



十一月号

ホトトギス

昭和二十八年三月二十八日 植物名所別巻 植物誌第六十七号
平成二十八年十一月一日発行 第百十七号 第百十七号



俳句随想〔四百十三〕

汀子

天地有情の通信欄は私へのメッセージと共に、私一人で拝見するのは勿体ないような事柄を書いて下さる方もある。それをここで読者の皆様にも見て頂きたい。「数年前の検診で血液検査に異常なく自覚症状も全くないに拘わらず血管、年齢だけが実年齢よりも20歳も高く出ました。タバコ、酒はやらすスポーツで汗も流していましたが、そのまかさかという思いでした。そこで食生活を見直し、主食は麦飯に、油はオリブ油かアマニ油に、野菜は毎食、魚、海藻、納豆は毎日とるように心掛けたところ、数年掛かりで年相応になりました。すると何となく気分がゆったりし俳句に對しても発想が広がる氣がします。健全なる精神は健全なる身体に宿るということでしようか。」とあった。この作者の職業は医師とある。医師もやはり生身の人間として、ご自分の体験を通して色々なことを知って、それを自分だけのものとせず、このように書いて下さった。私一人だけが読むのは勿体ないのでこの場を借りて誌友の皆様にご読んで頂く。

俳句を作ることも健康のためになると言われている。頭を使い吟行会で外の空気を吸い自然に触れる。どうぞ健康にご留意され、誌友の皆様が元気であることを祈っている。

最近、俳句がマンネリ化して壁に突き当たった様だと聞いたことがあった。壁に突き当たるのはその壁をどの様に乗り越えるかによって、自分の俳句の道が決まってくる。マンネリ化のままではなく、そこを破ってみては如何でしょうか。

旬日記 汀子

平成二十七年十月三日 芦屋ホトギス会

六甲の山近づけて小鳥来る
稜線の語る全き秋の晴
会場に揃ふ人数秋の晴

十月四日 下萌句会

稜線に雲置き初めし秋の山
抜けてゆく畦道ばつた従へて
病む人の消息伝へ冬近し

十月五日 ロイヤル吟行会

爽やかな旅のはじまる目覚かな
快晴の城山仰ぎ島の秋
えにしとは不思議爽やかなる出逢ひ

十月六日 中国ホトギス同人会

旅多き秋の一日を島にあり
影恋うて日差を恋うて秋の風
日本海色深き紺秋めきぬ

五年前來たる記憶を結ぶ秋
爽やかや日本海の色とこそ
秋の地の記憶を結び行ける秋

十月七日 中国ホトギス俳句大会

秋風の渡る御墓所を去り難く
晩秋の萩の夜明けの遅くとも
曲る場所秋草活けてある案内

十月八日 長谷川權様へ

快晴の二日の旅の露を踏む
鱗雲より頂きし元気かな

十月十二日 悼 和田克司先生

偲びても偲びても師の逝きし秋
もう聞けぬ子規のあれこれ秋深し
十月十三日 大阪倶楽部

今我に力あるとて露けしや
うそ寒といふほかはなし転びたる
迷惑をかけてしまひし秋思かな
十月十三日 綿業倶楽部

十月十五日 清交社

露けしや転びしことももう過去に
時間とはいやしてくるる露踏みて
野菊叢歩く楽しみあり乍ら
十月十五日 クラブ合同

十月二十一日 夏潮句会

怪我といふ油断のありて秋の暮
色鳥の來たる我家に退院す
助手席に和服しつとり秋の暮
助けくれたる人は誰秋の暮

十月二十一日 きさらぎ会

松手入済みて青空降りて來し
露けしや成行話し終へしとき
秋風に転びしことも幾そ度
露寒の仕事は待つてくれざりし

怪我せしを早々葛湯溶きくれし
添水鳴る忌日近づくと寿福寺に
十月二十一日 木の実落つ音の静寂に包まるる
冷やかに告げねばならぬ艮齋ありて
やや寒き朝の氣纏ひ上京す
又もとの健康戻りつつ秋を
秋惜む心やうやく取戻す

工業倶楽部 出句

やや寒きことも心地のよき時も
川浴ひの桜紅葉は海へ伸び
快晴のつづきやや寒ゆるびをり
十月二十三日 アネモネ句会

露寒といひ快晴の一部分
健康を取り戻しつつ秋惜む
露寒に癒えて行く日々ありしこと
再可動せしも旬日秋惜む

十月二十四日 句会と講演の会

秋灯の明るき下で待つことに
花籠に秋の心の色束ね
頬白と分る距離まで近づきし
スケジュール混みてほどけて露寒し

十月二十六日 年尾忌

怪我癒えて行く日々とても露けしや
行く先を決めずに出掛け紅葉狩
十三夜 仰ぎ 忌日の心とす
風渡る尾花の山路行く忌日

十月二十九日 摩耶山俳句大会

年尾忌に告げねばならぬことあり
快晴といふ冷やかな山氣満つ
とり敢へず間に合ひしこと露寒に
快晴を山氣に込めて摩耶の秋

十月三十日 時雨句会

客二人増えて準備の走り蕎麦
又踏んでしまひし木の実前うしろ
腹立ててならぬ転んでならぬ秋
怪我癒えてはや晩秋の旅二三

露霜の朝の早発ちとはなりぬ

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十七年十一月一日 野分会青嵐例会

茶の花や駿河の風を独り占め
一茶忌や雀に餌撒く焼鳥屋
十一月一日 青嵐会青嵐例会

金本に期待してゐる木の葉髪
木の小諸に虚子の世を訪ね
十一月二日 岡山囲碁会最終回

公園の広さを極めて古代米
出来秋の色を解きゆく
初鴨に水は硬さを解きゆく
曇天に十月桜緑取り

葉隠れといふ茶の花の褥かな
秋日傘差し花嫁となりゆける
十月三日 刈谷市民俳句大会

神送三河の旅を終へてより
十月四日 「二虹」新年号出句

白味噌に故郷俵を雑煮かな
太箸に絆深めてをりにけり
歯固や歯医者を知らず六十年
食積の一本に子等の箸集め

行秋や旅から帰り又旅へ
秋日濃し大川目覚めゆくほど
萩芒競ふことなく揺れてをり
神々の留守守る気節進めゆく

君見捨ておできの神の旅立てる

石路咲いて館に奥行生れ初むる
川普請パワースイッチヨベルの暇さうに
十一月六日 カトリック新聞選考時
爽やかや信徒の建てしてふチャペル
十一月六日 「俳句界」出句

曇天を十月桜 払ひゆく
晴れてゆく仔細に吉備の秋惜む
初鴨に水微笑んでをりにけり
初鴨に水微笑んでをりにけり

秋惜む旅は長距離運転で
秋惜む形に咲かせ路地の奥
日表に萩は長寿でありにけり
街騒を溶かして水の澄みゆけり

丸の内銀杏落葉を浴び退社
千姫は女菊師の手に委ね
金本を迎へ猛虎の魂宿る
一枝差し菊人形に魂宿る

初霜や人増ゆ朝の丸の内
鳴の陣平の賀に馳せ保ちつつ
東の忌西の賀に馳せ保ちつつ
初明り昨日を偲ぶものとして

その中に笹鳴加へ鳥語降る
神渡生駒鳴山明かしゆる
七坂は登つてなんば冬うら
黄落は口繩坂の目覚めゆく

幸村は父と同年朝時雨
幸村の涙雨とも朝時雨
十一月十七日 北國芸芸選考時

初霜を踏んで家出る午前五時
木の葉散る色を尽して丸の内
冬構先づ解禁のワイン酌む
夫ずばら妻几帳面冬構

初霜を踏んで家出る午前五時
木の葉散る色を尽して丸の内
冬構先づ解禁のワイン酌む
夫ずばら妻几帳面冬構

茶の花や日差の白日裏の黄
茶の花や吉備の白日裏の黄
一茶忌や浅間御機嫌斜めなる
花揺れて雀の句碑や一茶の忌

一茶忌や人より雀多き里
虚子作の歌舞伎に偲ぶ一茶の忌
一茶忌や浅間の機嫌伺ひつ
犬派より猫派多数派一茶の忌

神留守の丘に化身のやうな木々
その中にロマネンテイや神酒新酒
冬うらら道に聞かれし中国語
十一月二十四日 若水句会

天王寺 七坂 小春 猫 闊歩
驚飛んで湘固まつてをりにけり
失恋の涙に濡れてゐる小六月
昨夜の雨吸ひ上げておる小六月

祝ぎの座へ事務所を指呼に冬うらら
十一月二十八日 ホトトギス社句会

権之助坂凸凹に熊手行く
売れるより熊手はぬつと天を衝く

権之助坂凸凹に熊手行く
売れるより熊手はぬつと天を衝く

雑詠句評（十月号より）

雅 ・ 公次 ・ 一步

くに彦 ・ 佳乃 ・ 霜衣

しげ人 ・ 純也 ・ さい雪

仁義 ・ 廣太郎

蟻地獄奈落の底にある秘密 前橋 伊藤凉志

蟻地獄の潜んでいる美しい砂のすり鉢状の穴の底。残酷な思いはありながら、時折、小枝で掘り起こすのを脇で見ることがあるが、如何にも何かありそうである。

秘密を覗きたい好奇心が、こぞって取り囲む背。回りの人の姿までもが想像出来て、如何にもと思わせる。（雅）

告白してしまうと、筆者は子供の頂、よく蟻を捕まえてはこの「蟻地獄」へ落し、蟻が餌になってゆく様子をよく観察したもの

だ。確かに蟻は必死にもがいているが、中の蟻地獄はなかなか見えない。そんな不思議な生態が面白かったのも事実である。生命の不思議が「秘密」の一言から伝わってくる。（廣太郎）

蛆として白き命を賜りぬ 神戸 涌羅由美

地球上において、おおよそ「蛆」ほど、嫌悪感をもたれている生き物は、他にないのではなからうか。その「蛆」でさえ、生まれたときは、「白」という、汚れのない、大げさにいえば、人間の赤ん坊のように無垢である、と見ているところに、生き物すべてに対する作者の、平等な視線を感じると同時に、その心の大きさに、おどろきも感ずる一句である。「蛆」も、以て瞑すべし、であろう。（公次）

人間に嫌われる最有力候補のひとつである「蛆」は、考えてみると最近あまり見掛けなくなった。確かに成虫の蠅も一時期に較べると、都会ではかなり減っているのではないだろうか。そんな嫌われ者の季題をこの句は反対に出来るだけ美的感覚で詠んでいる。詩としての俳句の姿が伝わってくる。（度太郎）

天地有情

心子選

地車を回すだんだん高くなる
 ころはよし祇園囃子に誘はれそ
 師の言葉父の言葉として涼し
 つなぎし手離し祭の中へ消ゆ
 散るさくらみんな散りたくなさうに
 芦屋川渡るよろこび散るさくら
 梅日和マラソン日和てふ都心
 マラソンの果てし路面の返返る
 縁先に蝶来る地震のニュースまた
 薔薇園へ誘ふ香りの風のみち
 仙人掌の花を囲みで昔恋ふ
 若竹にたとへられたる頃もありし
 誰よりも長閑に生きてゐるつもり
 老虚子の殊に薄暑を好まれし
 子燕の顔出してゐる余震かな
 鎮魂のごとく瓦礫に水を打つ
 真言の心に高き帰り花
 石庭の波に乗りたる散紅葉

神戸 後藤立夫
 同 和田華凜
 同 後藤比奈夫
 東京 稲畑廣太郎
 同 安原 葉
 長岡 同
 東京 今井千鶴子
 同 相模原 木村享史
 熊本 同
 岩岡中正
 同 福山 竹下陶子
 同

潮の香を存分に浴び神戸首夏
 露坐仏の背に老鶯の慕ひ鳴く
 若竹といふ生命のみなぎれる
 死神といへど涼しき虚子の能
 草丈を抜き笹百合の一花かな
 山峡の空低くして桐の花
 山住や畑も小径も枯色に
 幾つかの齟齬無きことに秋晴れて
 黒南風や一樹に籠もる鳥の声
 草の声水の音聴く夏帽子
 小さくとも確かな歩み万緑に
 青嵐めきて幼子やつてくる
 解け初むる穂先の月を待ちをりぬ
 鰯雲水の流れの果てしなく
 海風を吸ひゐるごとく咲いて萩
 散りやすきことよ牡丹でありしこと
 生きてゐるかぎり涼しくあらまほし
 涼しさの極みといふはまだ知らず

吹田 大橋 暁
 同 神戸 三村純也
 同 米子 中村襄介
 同 横手 伊藤とほ歩
 同 東京 河野美奇
 同 龍ヶ崎 今橋真理子
 同 東京 今井肖子
 同 熱海 嶋田一步
 同 群馬 中杉隆世
 同

運 転

稲畑汀子

北近畿ホトトギス大会は、今年も例年通り六月の三週目の土日に開催された。はや、三十四回を重ねて来たこの会も、お世話をして下さる吉田節子さん、松山ひとし御夫妻、宮本幸子さんを中心とした福知山の方々のご努力のおかげで続けて来られたのであるが、すでに多くの方が亡くなられた。

日本各地で開催される十一ブロックのホトトギス大会に行くに必ず松山御夫妻が出席されている。ひとしさんは少々脚を悪くされているが、夫人の牧子さんの介助もあつて、遠くは北海道、東北、九州をはじめ、驚く程の気力を持って各地に参加され、北近畿ホトトギス大会に生かしていかれるのを見て頭が下がる思いで、一緒にさせて頂いている。今年の北近畿ホトトギス大会には、遠く秋田から伊藤とほ歩さん。九州から金子三郎さん。松山御夫妻と親しくなつて出席された。出席者百二十六名という大勢の参加で会が盛り上がった。

梅雨の最中の会であるが、前日の吟行句会はよく晴れた。バス二台が連なつて、但馬の夜久野の古い火山の名残を止めている場

所への吟行である。岬々と聳え立つ柱状節理の山肌が見えて来た所でバスは停まり、辺りの整備された公園に三々五々と散つて行った。邂逅を喜び、さつそく句帳を開いて句作に励む人、人。

「九州から、よく来られましたね！ 松山ひとしご夫妻が九州へ行かれた時に親しくなられたと伺いましたよ」

柱状節理の岩肌をすべるように滝が落ちているのを見ながら、私は側の金子三郎さんに声をかけた。

「先生、そこを二三歩寄られたらいい木陰になっていますよ」

「あら、本当」

梅雨の晴れ間の山の日差しは結構強い。

「ん、一句できた。一三步を寄れば緑の木蔭あり」

「あの滝は作り滝です。人が大勢集まるとスイッチが入つて水が落ちるようになっていのですよ」

誰かが声をかけて行く。

四阿があつて、そこからの滝の情景が美しいのである。私は内心「作り滝なんておっしゃらなくてもいいのに」と呟いた。

「三郎さん、帰りは真つ直ぐ九州へお帰りになるの？」

「せっかくなはる来たのだから、一三日後に関西空港から帰る、切符を用意してあるのです。虚子記念館にも寄りたいたし」

「ぜひいらして下さい。でも、月曜日は休館日だわ」

「はい、存じております」

盛会の内に会は終了した。帰路の車に奥田好子さんに同乗して頂くので安心である。

「気をつけて行きますから、安心して下さい」

朝、好子さんを送って来られたご主人に挨拶をした責任がある。二日目の夕刻に芦屋に着くとほっとした。

次の日、月曜日のアサヒカルチャーは句会である。二十一日は夏至であった。私が、夏至が過ぎると日が短くなって行くのが侘しくて嫌いだと言っていたら「汀子先生夏至が好き」という句が出句されてしまったのもこの会の時であった。火曜日の午後は大阪で二つ句会がある。電話が鳴った。「え？ 誰だろう」受話器を取ると金子三郎さんからである。「今、どこから?」「虚子記念文学館に伺いましたが」時計を見ると九時半である。「まだ開いて無いのでは。今そこへ参ります」

庭から鍵を開けて記念館の表へ急いだ。

「記念館が開くまで家へいらして下さい。どうぞ」

彼はパイロットを四十年近く勤め、普賢岳が噴火した時にその上を飛行していたと聞いた。私はその時、島原へ向かうタクシーの中にいましたと話した。NHK俳壇で桂文珍さんから、自家用飛行機で八尾空港から神戸空港へ飛んだ話から話の糸がほぐれ、

笑っている内に時間が経過してしまった。虚子記念文学館を見て来られた三郎さんを芦屋のJR駅まで送って、急いで大阪に向かった私は、彼にお茶しか差し上げなかったことに気がついた。「車の運転は余り好きではないのです」という三郎さんを芦屋駅まで慎重に送ったことにはっとしていた。

